COMBINED FLEET GIRLS COLLECTION FAN BOOK

おしっこれくしょん　駆逐艦編　四

PISS-COLLE DESTROYERS IV

VOLUME 06 FOR ADULT ONLY

防空駆逐艦　秋月のひとりごと

艦娘として甦った私たちの、〝娘〟としての容姿や内面はどうやって形成されているのだろう。というのは、人間・艦娘共通の研究対象なんだそうです。艦娘自体何なのかもよくわからないので、研究のしようがなさそうですけど。

瑞鳳さんはどうして、あんなに艦載機を偏愛する、ちょっとヘンな女の子になったのだろう、とか。私たち秋月型がよく似ていると言われた夕張さんはなんだって、小さい女の子の姿をとった駆逐艦娘が大好きな変態さんに……とか。わからないことだらけです。駆逐艦としてはかなり大柄で、夕張さんとあまり変わらないサイズだった私が、他の駆逐の子たちよりは年かさっぽい見た目なのは、なんとなくそういう仕様なんだろうとは思えますけど。

……でもですね。いくら、四水戦や十戦隊の旗艦として駆逐隊を率いたことがあるからといってですね。

艦娘の私が駆逐艦娘に劣情を抱く変態になるってどういうことですか!?

見た目だけじゃなく中身まで夕張さんに似てしまうなんて。夕張さんに他意はないけど、不本意です。こんな……着任早々「こうして艦娘として再会できたことだし、女どうし裸の付き合いがしたい」なんて、駆逐の子たちを誘いだして……今から、どうしようもなく興奮して、下着を濡らしているなんて……。

吹雪型二番艦
白雪
下着姿
十一駆の彼女とは、ガダルカナル方面で一緒でした。どういうわけか私の頭には、今と同じ、お下げにセーラー服の少女が鉄底海峡を駆けていた記憶があります。そんなはずはないんですけどね……なんて私冷静さを装っていますが、可愛らしいブラとパンツだけの格好で思わせぶりな視線を向けられ、その、たいへんです。
胸部装甲
えっと……白雪さん？　そ、その挑発的な行為は何なのでしょうか……かろうじて持ち上げられる程度のおっぱいが絶妙に柔らかそうで、心のおち……長十センチ砲が暴発寸前なんですけど。もしかして……けっこう、エッチな子なんでしょうか……。
陰部
あ……初雪さんと、懇ろな関係なんですか……。失礼しました。やっぱり特型の子は進んでいるのね。陰毛も、少なめだけどしっかり生えていて。あんまり縮れていないのも上品さを感じさせて、私好みなのです。

性器

あの。い、いいんでしょうか……。躊躇う私に微笑みかけると、白雪さんはパンツの股布を寄せてあっさりと性器を剥きだしにしました。そしてぐにっと、指で陰唇を……うっ。鼻血が。「ちゃんと見てください」頬を赤らめながら白雪さん。「どうですか……ここ」えと。けっこう……穴、大きいんですね。ひだの色が濃くて……濡れていて……い、いやらしい、です。でも、綺麗です。私、好きです。白雪さんのここ。「ふふ……ありがとうございます。初雪ちゃんも、そう言ってくれるの」

放尿

「おしっこ……興味あるのね」……あの……すごくあります。すみません。本当に変態で……。「大丈夫。駆逐艦みんな、遠征中に海の上で一緒にするのは慣れていますから。見せっこしたり、そこから、色々始まったりする子も多いのよ。みんなエッチな年頃なんです。んっ……出る」しゅーっ……女の子特有の鋭い音を立てながら、白雪さんのおしっこが地面に広がっていきます。匂いで達してしまいそう。

自慰

「はあっ……はあっ」激しい息づかいと、ぐちぐちという粘っこい音が響きます。白雪さん、すごく、手馴れています。「は、初雪と、するだけじゃ、足りなくてっ。ベッドの中とか、トイレとか、ドックとか、遠征の休憩中とかっ」所かまわずですか！「だって、気持ちいいんだもんっ……あっ、イく、イ……く……ううっっっ」

吹雪型三番艦
初雪。
下着姿
「何……？」「!?」のっそりと部屋から出てきた初雪さん、いきなり下着姿でした。「んもう初雪ちゃんたら……ごめんなさい秋月さん、初雪ちゃんはその、あんまり活発じゃなくて。オフの日はいつもこうなんです」「は、はぁ」私の記憶では、彼女は〝昔〟、あちこちで奮戦した殊勲艦のはず。「昔は昔。今は、部屋で寝てたい、です」
胸部装甲
「はだか……別にいいけど」「あっ、私ブラ脱がすね」白雪さんの介護（？）で、意外にふくよかな胸部装甲があらわに。だらだらしているからなのか、わりと身体に脂肪がついていますね。「二水戦ダイエットとかどうですか？」「やだ……めんどくさい」
陰部
「初雪ちゃん、下は吹雪型で一番オトナなんです」白雪さんの言うとおり、初雪さんの陰毛はかなりしっかり生えそろっています。「恥ずかしいよ……」抗議の声を上げながらも初雪さん、満更でもなさそう。

性器・放尿

『初雪ちゃん、お風呂入っていないでのが取れたわ。あむ……しょっぱい。でも柔らかいのよ、花びらのところ。い？　初雪ちゃん。……ん。いいよ。たいつで。ええ。初雪ちゃん、秋月さであげるから……ほら、し-し-、しーね。たまにね、私がさせてあげてるん愛くて……ふふ、秋月さん、手が股にしょう。ここ、匂うわよ。ホラ……白いふふ。秋月さん、触ってみます？　とっ……お豆さんが顔出してるわ。気持ちい秋月さん、初雪ちゃんがね、おしっこしんに見せてあげましょうね。私が広げて……ふふ、出てる。寝起きだから濃いわですよ。小さな妹みたいで初雪ちゃん可伸びてますよ。興奮してるのね』

Love is touch, touch is love

「うん。私が……してあげる。こともある。いろんな、ことがめんどくさいけど。白雪とするのはめんどくさくない、です。好き、だから。本当はずっと、こうしたい。けど、初雪は艦娘だから。他の、こうしたい人たちのためにも、めんどくさいけど、戦う。です」

綾波型七番艦
朧
下着姿
「なんで脱ぐ必要なんかあるの？」赤面して睨んでくる朧さん。でもしっかり、青いリボンのかわいい下着姿になってくれています。「かわいいから」思ったままに答えると、いっそう赤くなりました。朧さんとは"昔"いっしょに瑞鶴さんを護衛したことがあります。七駆をひとり離れてがんばっていたんですよね。
胸部装甲
「秋月のえっち……！」ブラを見てもしやと思い、ちょっとイケナイ感じに胸部装甲を披露してもらったんですが……こ、これはなかなかのボリューム。妹の潮さんほどではないですが、ふんわりと膨らんでいます。うへへ。うへへへ。「あの秋月がこんな子になっちゃうなんて……」
陰部
「秋月の変態……」弱弱しい抗議を受け流しながら、露わになった下半身をじっくり観察しました。まだ少ない陰毛の長さが印象的です。その下にはぱっきりと顔を覗かせる、ピンク色の小陰唇が。「朧さん……かわいい」「どこ見て言ってるのよ！」

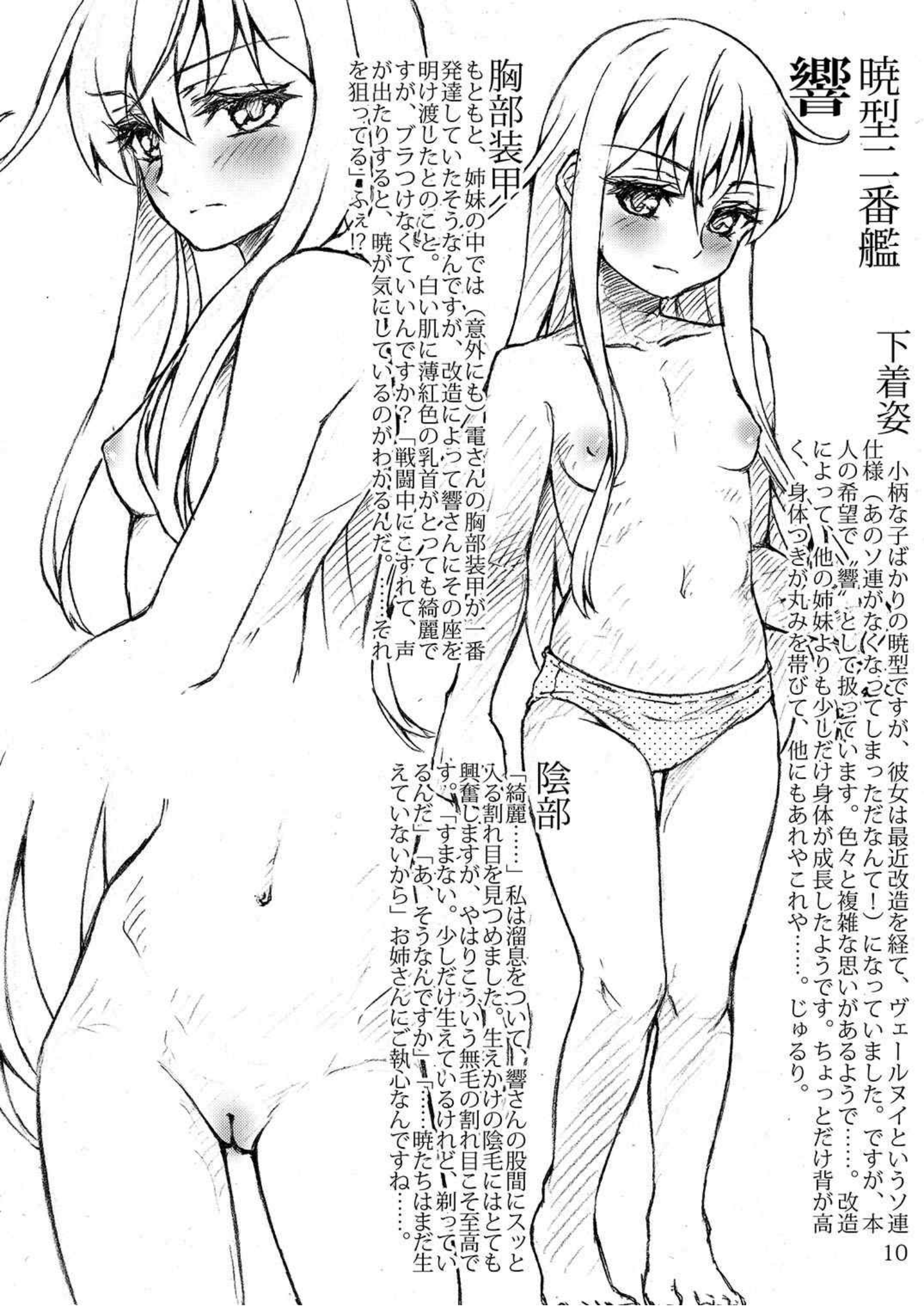
性器

「アタシ……なんかヘンな気分になってきた……」震える指で、厚みのある小陰唇が広げられました。中はとろっとろです。時折きゅっと狭まる膣口がたまらなく「かわいい……かわいくて、いやらしい」「秋月それればかり」「本当にそう思うんです。ここを見ると、すごくその子が人として生きてるって、感じがするから、好きなんです。もちろん興奮もしますけど」

放尿、そして

「これも……生きてるって感じるから好きなの？」「これは大部分性欲です」「オイ」「でも……うん。この温かさは」「ちょっと、おしっこ触るなんて」「たしかに、この温かさ……朧さんが生きてるって証拠ですよね。生きて、妹さんたちと笑いあえてる」「……。じゃあ、責任とって、生きてるって、もっと感じさせて」

「朧さん……また会えて嬉しいです。会えて、おっぱい見られて、おしっこさせられて、おまんこ触れて、嬉しい」「ふあ、アタシ……もっと」



暁型二番艦 響

下着姿

小柄な子ばかりの暁型ですが、彼女は最近改造を経て、ヴェールヌイというソ連仕様（あのソ連がなくなってしまっただなんて！）になっていました。ですが、本人の希望で〝響〟として扱っています。色々と複雑な思いがあるようで……。改造によって他の姉妹よりも少しだけ身体が成長したようです。ちょっとだけ背が高く、身体つきが丸みを帯びて、他にもあれやこれや……。じゅるり。

胸部装甲

もともと、姉妹の中では（意外にも）電さんの胸部装甲が一番発達していたそうなんですが、改造によって響さんにその座を明け渡したとのこと。白い肌に薄紅色の乳首がとっても綺麗ですが、ブラつけなくていいんですか？「戦闘中にこすれて、声が出たりすると、暁が気にしているのがわかるんだ。……それを狙ってる」ふぇ!?

陰部

「綺麗……」私は溜息をついて、響さんの股間にスッと入る割れ目を見つめました。生えかけの陰毛にはとても興奮しますが、やはりこういう無毛の割れ目こそ至高です。「すまない。少しだけ生えているけれど、剃っているんだ」「あ、そうなんですか」「……暁たちはまだ生えていないから」お姉さんにご執心なんですね……。

性器

改造してわずかに毛も生えたものの、性器はまだまだ幼いまま。小陰唇もあまり発達せず、陰裂に埋もれ気味です。「暁さんのとか、見たことあるんですか？」「な、ないよ！　ないよ……そんなの。でも……知ってるんだ。時々、暁がひとりでしてること。見たい……暁が指を入れているそこを見たい。けど、その勇気がないんだ……」

放尿

ドックで、洗面器の上にかがんでもらいました。「んっ……」じゃあああ、とおしっこが注がれていきます。「時々、暁たちがこんなことをして遊んでいるんだ。私は叱るけれど……ほんとは混ざりたい。一緒におしっこで遊びたい。……ダメだね、見栄ばかり張ってるのは暁じゃなくて、きっと私なんだ」

自慰

「はっ……はっ……あ、暁い……」夜中、暁さんの自慰に気づくと、決まって自分も性欲を抑えきれなくなり、トイレへ駆けこんで指でするのだそうです。「もう、ひとりは……いやだよ……」

初春型二番艦 子日

下着姿1

私が竣工したのは、護るべき航空戦隊がミッドウェーで壊滅した直後でした。なので、〝昔〟はあまり馴染みのなかった艦娘も何人かいます。私の竣工と就役から、一ヶ月もしないうちに北方で沈んだ彼女もそのひとり。彼女は色々と示唆に富む艦娘なのですが、とりあえず今はスパッツ姿を見せてもらっています。これはこれでなんともいえない色気がありますね……。

下着姿2

スパッツ……というかアンダーウェアの下はスポーティなブラとパンツでした。言動に反しておっぱい大きいです。言動……彼女、〝昔〟の記憶がほとんどないんだそうです。ただ、自分が初春型二番艦であり、艦娘たちは自分の仲間であることだけは認識しているようで、艦娘の謎を解明するため、時々技術本部へ検査に行っています。

胸部装甲・陰部

活発……というか精神的に幾分[redacted]い子日さん、私の求めに応じてペロッと全裸になってくれました。「子日〝かわいい?〟」かわいいです。桜色の乳首とか、ぴっちり閉じた割れ目の上にちろちろと生えている陰毛とか。……彼女は艤装を捨て、ひとりの少女として生きるほうが幸せではないかという議論もあったそうです。でも、本人はあくまで、私たちと一緒に居るのが楽しいようで……。

性器

彼女の■さにつけこむ勇気もなく、正直に頼みました。性器を見せてほしいと。目の前に突きだされ広げられたそれは、あまり発達もしていません。排泄にしか使っていないのかと思いきや、刺激すると気持ちよくなることを知って、時々いじっているんだそうです。「子日、気持ちよくなると、なんかいろいろ思いだす気がする」

放尿

すみません。秋月、子日さんの格好を見たときからこれをやってもらおうと思っていたんです。「うん、いつもこの格好でおしっこするよ」すなわち、上着の裾をからげ、スパッツとパンツを下ろし、中腰でお尻を突きだして後ろへ放尿！　しゃぱーと勢いよく一直線に、おしっこが飛んでいきます。ぱしゃぱしゃ……と地面を叩く音。どんどん広がる尿溜まり。「あ、あ、ああ、あああああ!!!」「秋月ちゃん？　どうしたの？」……見ているだけで、イッてしまいました……。ちょろいです私。

自慰

目の前に子日さんが横たわり、秘所をぐちゅぐちゅと激しくかき乱しながら喘いでいます。すっかり〝女〟の表情。なんでも夕張さんいわく、自慰は自己同一性の確立を後押しするはたらきがあるのだそうで、彼女は自慰をすることで次第に自分が何者であるかを思いだしていっているとか。果たして、それはこのあどけない少女にとって本当に幸せなことなのか、私には答えを出せませんでした。

朝潮型四番艦 荒潮

下着姿1

彼女がダンピール海峡で悲劇に見舞われたとき、私はトラックにいて、明石さんに修理してもらっていました。どんな艦娘になったんだろうと思っていたので、この艶っぽい少女が荒潮さんだと知って驚いたものです。でも……今、こうしてブラとスパッツという格好の彼女をよく見ると、随所に[redacted]さが顔を覗かせています。「いきなり脱がせるなんて大胆ねぇ」と余裕げに微笑んでいますが、頬が赤いです。

下着姿2・胸部装甲

上下一枚ずつとって、パンツ一丁になってもらいました。「うふふふふ……どお？」まだお姉さん口調ですが、目が泳いでいます。か、かわいい……。パンツとかささやかなおっぱいとか、いろいろと[redacted]。ギャップ萌えです！

陰部

とうとうパンツも脱がせたら、「こ……ここも見るの？」少し弱気になってしまいました。抱きしめたりして安心させながら事を進めます。生えかけの陰毛は、大陰唇にも及んでいました。なんとなく撫ぜてみると、ぴくん！と反応して、茹でだこのように真っ赤な顔に。

性器

「秋月の……えっち……」ほ、ほーっ、ホアアーッ!! ホアーッ!! す、すみません取り乱してしまいました。朧さんにも同じことを言われましたが、破壊力が違いますッ。大人ぶった余裕がはがれてしまい、涙目になりながら、震える指で幼い秘裂を押し広げる荒sほ、ほーっ、ホアアーッ!! ホアーッ!! 「本当にこの子、帝國海軍の誇る乙型駆逐艦だったのかしら……」

放尿

「お、おしっこを見せろなんて……素敵なことするのね……」しゃがみこんで数秒。お尻へ伝い落ちた流れは、やがて一本の水流となり、じょろろろろ……と地面へ排泄されていきました。「遠征先とかで、しないんですか?」「そんなの、子供じゃないんだから……朝潮の前以外では、しないわ」あっ……朝潮さんといえば、あのときの。なるほど……「……姉を好きになるって、おかしいかしら?」まさか!

自慰

「あ、あ、あ、あさ、しお」ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ。名前のごとく、荒々しい指づかいと息づかいで、自らの膣を責めたてる荒潮さん。愛液はとうに白く濁り、だらだらと溢れつづけています。……果てしばらくしてから、荒潮さんがつぶやきました。「朝潮は……みんなのヒーローだから。私ひとりに振り向いてはくれないし、振り向かせてはいけないの」何それ。頭にきた私が奔走して、二人をゴールインさせたのは――また別の話です。

朝潮型五番艦
朝雲

下着姿1

「裸見せろって、あ、あんたロリコンだったの!?」「そ、そうよ！」朝雲のツッコミに思わず胸を張って答えてしまいました。ソロモンで四水戦旗艦をお願いしたこともある朝雲は、同じ作戦で艦娘として着任した、数少ない気安く話せる友達です。「あ、秋月や山雲になら、まあ……ううん、恥ずかしい」そんな友達の下着姿に興奮する私はなんなんだって話ですが。

下着姿2・胸部装甲

「うへ、うへへへぇ……朝雲かわいい……おっぱいちっちゃい……」「さすがにキモいんだけど……秋月だって図体大きいわりに胸はたいしたことないじゃない」「うっ」「痩せっぽちだしさ、ちゃんとご飯食べないと空母の人たち心配するわよ」「うぅ……ぜ、贅沢は敵よ」

陰部

「朝雲、まだ全然生えてないのね……割れ目がすごくよく見えるよ」「はぁ恥ずかしくて機関が暴走しそう……」「改造したら生えちゃうのかな……ずっとこのままならいいのに」「あたしも活躍したいんだけど!?」

性器・放尿

「山雲さん……ごめんなさい。朝雲の大事なところ、秋月が先に見ます」未だ現れない朝雲の妹・山雲さんに詫びを入れました。「……どう？」「ホアアーッ」「それはもういいから！　……おかしく、ないかな。形とか、色とか」「……率直に言うとね」「うん」「ちっちゃい。見た目どおり、[redacted]のおまんこ」「おま……」「でもね、ぷるぷるしてて、すごく綺麗。朝雲はここもかわいいのねって、思う。山雲さんもきっと、そう言ってくれる」「山雲……」「……そろそろ」「本当に、いいの？」「うん。もう、うずうずしてる」「変態さんね……だ、すわよ」しょわ、しょわわわ……ぷしゃあああ……「んくっ、んくっ」「秋月が……あたしのおしっこ飲んでる……やだ、気持ち……い、い」「んっ……んくっ」「もうちょっと出るから……最後まで……っ」「んくっ……ぷ、はあ」『おしっこ……友達に飲ませちゃった……』『あ、朝雲ぉ……』「秋月……身体、あつい」

夜

時々、どうしようもなく夜が怖い、と朝雲が私の腕の中で言いました。山雲さんが来るまでは、たまらなくなったときは、秋月がそばにいてあげることにしました。これでいいんです。きっと。

陽炎型十一番艦 浦風

下着姿・胸部装甲

開戦直後から空母の護衛任務にあたっていた第十七駆逐隊は、秋月の同業者かつ先輩なのですが、その後私が旗艦として彼女たちを嚮導することもあったので、まあ気のおけない〝戦友〟です。というわけで、言わせてもらいます。「なんでブラつけてないのよ！」「へ？　いや最初に支給されんかったからなんとなく」「め、目の毒だから！」

下着姿2

秋月はロリコンですが、さりとて、友人が平然と立派なおっぱいを放りだして歩き回っていたりするのは心穏やかではいられません。「せっかく可愛いパンツとセットのブラがあるんだから付けようよ。ほら、似合ってるよ」「んー、窮屈じゃのう……というが、隠すとかえって恥ずかしゅうなってきたんじゃが」

陰部

「んー、改めてジロジロ見られると照れるのぅ……」そう言う浦風の下腹部は実に立派な陰毛に覆われていました。「別に身体に不満はないけど、他の駆逐の子ぉらにあんまり羨ましがられるんも、なんぞ、仲間はずれみたいで寂しいんよ。なりはこんなんでも、うちらもたいがい[redacted]じゃけん……」「……ちょっと、わかる」「あんたもデカいけんのぉ。乳はちんまいがの」「ほ、ほっといてよ！」

性器

「うちのオメコ見て興奮するん……？　小さい子と違うて、毛のえっと生えちょるし、なんぞぐねぐねしとって気色悪いよ？」「……たしかに、空母の人たちと変わらないくらい大人っぽいけど……浦風のだから。この」「んっ……」「厚ぼったいひだひだも、隠れてるお豆さんも、とろとろの穴も、どんどん溢れてくるおつゆも、全部、好き」「やっ……ぁ」「……浦風？」「ふ……秋月が優しいこと言うけぇ……少しイッてしもうた」

放尿

ちょろちょろちょろ……しゃあああ……「こがいなもん、よう人に見せられんわ……磯風や谷風は他のちんまい駆逐の子らみたいに、海の上で普通にしちょるが。ん……でも、磯風がおしっこしとるの見ると、確かにうちもドキドキするわ……うちのを見て磯風も興奮するんかのぅ。今のあんたみたく」

自慰

十七駆は四人部屋に布団を敷いて、川の字（？）で寝ます。ひとりでしたくなったときは他の駆逐の子たちみたいに、枕をひっくり返すんだそうです。で、他の三人が空気を読んで早めに寝静まったあと、声を押し殺して布団の中でするんだとか。なんだか、そのシチュエーション自体がエッチですね。「あっ……あ、あー……うぅ、漏らしてもうた。あっ、秋月、そがいなもん舐めたら……げに変態さんじゃのぉこの子は」

陽炎型十二番艦 磯風

下着姿。胸部装甲

「あの……磯風？」「どうした秋月、握り飯と間違えて石ころを持参したような顔をして。言うとおり服を脱いでやったのに。この磯風もそれなりに乳はあるぞ」「それなりの胸なのに、その子供パンツは何なの……いくら私がロリコンでも嬉しくないよ……」「うちの言ったとおりじゃろ？　磯風は戦上手じゃけど、もうとんだボンクラで……」

下着姿2

「おお、これは乳バンドだな。昔見たぞ」「その子供パンツとセットなのに……。下着については司令に抜本的な改革を具申するとして、とりあえず十七駆のみんなにはちゃんとブラをつけてもらいます」「強くなった気がする。礼を言うぞ秋月。お前はいい奴だな」「……良心が」

陰部

「どうして浦風も裸になったのかわからんが……やはり大人だな。この磯風、あいにく毛はろくに生えておらぬ。戦いの場なら大和や武蔵にも引けをとるつもりはないが、こればかりはな……鼻の下が長いぞ秋月」

性器

「秋月といい浦風といい、浜風谷風も、どうしてこんなところを見たがるのだ？」「それはその、生命の神秘というか……磯風はこういうことをしてドキドキしたりしないの？」「ん……少は。『えっち』というやつなんだろうが、この磯風、戦いのこと以外はよく知らぬ。そういうのは浦風たちに任せているのだ。知っているか秋月、枕を裏返しにした艦娘は夜中に『えっち』をするらしいぞ」「え、ええまあ」秋月、この純真さには勝てません……。

放尿

「小用はこれ、このように海上で他の駆逐艦たちと一緒に。……なんだ、何故そんなにジロジロ見るんだ秋月に浦風。……なにやら急に照れくさくなってきたぞ」「秋月。うち、もう辛抱たまらん」

性交

「う、うら、かぜ。そこ、用を足したばかりなのに」「すばろーしいわ。あんたが悪いんじゃ……うち、ずっとあんたんこと……」「あ、あ、やめ……なんか、へんな気持ち……これ、『えっち』なのか？」「ほうじゃ。この浦風が、磯風を犯しちょるんじゃ」「あ、あ、浦風、ゆび」「おどりゃ、やらしげな声出しよってからに……たいがいかわええんじゃ。好き……大好きじゃ磯風……今度はうちら十七駆、ずっと、一緒じゃけんな……一緒に幸せになるんじゃけんな……」

陽炎型十三番艦
浜風

下着姿・胸部装甲

「あ、あの秋月」「はふぅ……」「出会いがしらにいきなり胸を揉みはじめて、それからずっと揉みっぱなしなのはさすがに怖いんだけど」「……はっ。ご、ごめんなさい！」「すごかったのぉ今のは。吸い寄せられるように乳に手が伸びていきよった」「ろりこん？　とかいうやつでも浜風の乳には勝てぬのだな。我が妹ながらたいしたものだ」

下着姿2

いや、だって、浜風のおっぱいは別腹ですよね!?　艦娘のみならず提督まで含めて皆の心のオアシスなんです。それだけに、装甲が吹き飛んで剥きだしになった姿を、港の殿方たちにじろじろ見られるのは我慢なりません。さあブラを……お、おぉ……「ん……ちょっと窮屈……」「乳バンドから溢れているぞ。すごいな……すごい」「秋月、鼻血出ちょる鼻血！」

陰部

「浜風の下の毛は綺麗なんよ。うちのはなんか、濃ゆいばかりで好かん」「この磯風から見ればろ」「あ……すごくいい手触り」「なんでこの人たち、私の……の品評会開いてるの!?」

性器・放尿

「い、磯風、あんまり見つめないで……」「浜風。磯風は先ほど、浦風と『えっち』をした」「ファッ!?」「『えっち』がどういうものか、この磯風にもわかった気がするのだ。今、お前の股ぐらを覗きこんで、胸が苦しい」「磯風……」「さあ、用を足すがよい」「う、う……本当に、するの……？」「艦娘に二言はない」「ボイラーが沸騰しそう……あ、ん、出る……」「おぉ……噴水のようだな。女の小水はこんなふうに出るのか……」「し、死んじゃう」「はぁ、はぁ……妹が用を足しているのを見るだけで、何故こんなに胸が高鳴るんだ……？　うい浦風、秋月、この磯風はど、どうしたら」

性交

秋月の目の前で、十七駆の三人が互いをまさぐりあい、喘いでいます。というか浜風総受け（と言うらしいです。秋雲さんの部屋で読んだまんがの知識です）です。磯風が赤ちゃんのように、浜風の豊満すぎる乳房を吸い、さらに後ろからは浦風が、浜風の秘裂を指で責める。三人ともすっかり蕩けきった表情で、汗と涙と唾液と愛液と尿にまみれています。いやぁ……百合って、本当に、いいものですね。

陽炎型十四番艦
谷風

下着姿

「どうしたんだ谷風」磯風が声を上げました。十七駆の部屋にひとり居なかった谷風が戻ってきて、やけに素直に服を脱いで子供パンツ一枚になってくれたのですが、なんだか様子が変です。「磯風の顔を見ろ。……お前、泣いたのか？　誰かにいじめられたのか？」「違う」

陰部

私が、まだ陰毛のない谷風の綺麗な割れ目に見とれる一方、姉三人の表情がわずかに硬くなりました。戦争中、十六駆でひとり生き残り、十七駆に編入された雪風さんは、谷風の乗組員に陰口を叩かれたことがあります。雪風が十六駆の僚艦を食い尽くした、と。それからほどなく谷風は沈みました。捷一号作戦で私が沈んだ後のことは、艦娘になって雪風さん自身から聞きました。浦風・浜風・磯風も櫛の歯が抜けるように失われ、結果的に雪風は十七駆の僚艦たちをも食い尽くして生き延びたと。「何か言わなきゃ、と思ってて。でも勇気出なくて。でもやっぱり、そのままにはしとけなかった」

胸部装甲

谷風はブラが必要なほど発育もしておらず、十七駆では唯一私のストライクゾーンに勝負を仕掛けてくる末っ子です。が、そんなことを言っている場合でもなく、谷風をかわるがわる心配しながらヌードを鑑賞する秋月と姉三人という謎の事態に。しばらくして、谷風が口を開きました。「……雪風ん、どこ行ってきた」

性器

「そしたらまあ聞いてくれよ。しばらくお互い黙ってたんだけど、雪風のやつ、いきなり服脱ぎはじめてさ。あたいにも脱げってんだよ。今やってるみたいにな。しゃあないから二人してすっぽんぽんだよ。そんで雪風あたいの裸をジロジロ見て言うんだよ。ちゃんと生きてるって。……まあ、こんなふうに、おまたも見られた。恥ずかしかったけど、あいつも見せてくれて。なんか、緊張がほぐれたね」

放尿

「そんで……なんか、二人で屋上登って、中庭に向けて立ちションした。遠征中に海でやってるみたいに。あいつ立ちション上手いんだよなんか、男がちんぽこでやるみたいに前にびゃーってションベンが飛んでくんだ。あたいなんか足に伝っちまって……で、面に向けてションベンが何メートルも飛ぶから、虹がかかったんだよ！　すっげえドキドキしてたけど、なんか立ち笑っちまった。二人してションしながら、ゲラゲラ笑いあったんだ。……そんで」

赦し

「……そんで、気がついたら、二人じて泣いてた。パンツもはかないで、抱きあってわんわん泣いた。ごめん、って。ひでえこと言って、ごめん、真っ先に沈んでいやな思いさせて、ごめんって……そしたら、あいつ、ぐすっ、生き残ってごめんって言いやがるから、バーロー、胸張れって……あ、あいつ、ぐしゅ、谷風もがんばったねって……うわあぁぁぁ」大泣きする谷風を、みんなで抱きしめました。「偉いぞ。この磯風の、自慢の妹だ。雪風も、自慢の仲間だ」磯風が目を真っ赤にして微笑んでいます。……谷風と雪風さんは、その日から、友達になりました。

陽炎型十五番艦
野分

下着姿

「は、恥ずかしいですよ……」わずかに頬を赤らめた下着姿の野分さんが、半眼で私を見ています。野分さんも第十戦隊の同僚ですが、あまり顔を合わせる機会がなかったのとお互いの性格とで、まだ少し距離があります。それにしても、スポーティな下着、カッコカワイイですね。

胸部装甲

「ちょ、何拝んでるんですか！」あまりにもささやかな胸を隠そうとしながら、野分さんが涙目で睨んできます。「あ、いえ、久々に駆逐艦娘らしいかわいいおっぱいを目にしたものでつい」「し、失礼な！　……野分だって　そのうち浜風姉さんみたいに……」

陰部

「はぁ……やっぱりつるつるのおまたに限りますよね」「同意を求められても……。舞風には変なことしないでくださいね？」「いえ、それなんですが」私が、夕張さんの撮った舞風ちゃん（何故ちゃん付けかって？　かわいいからですよッ！）の秘蔵写真データを見せると、野分さん真っ赤になり、食い入るように見つめていました。そして一言、「……野分もデータいただけませんか？」それを聞いて私は、ある人物を部屋に招き入れました。野分さんが驚愕します。「ま、舞風!?」

性器・愛撫

「野分、あたしの写真見てエッチなこと考えたんだ？」「そ、それは……かわいかったから……」「ひとりエッチしようと思った？」「なっ!?」「あたしはね、してたよ」「!!」「野分のこと思いながら、ずっとね。野分も……あたしを思って」「やぁ……っ」「ひとりでこ、触ってくれたら、あたし嬉しいな」「ま、舞風ぇ」「あ、そこ、」「かわいいな……ぷにぷにしてて、ちっちゃくて」「気持ちいい？　お豆さんを皮の上から撫でてるのよ」「は、ぁ……きもち、いい」「穴からエッチなおつゆが溢れてくる……野分もちゃんといやらしい女の子で、よかった」「ら、らって舞風が」「野分、ずっと会いたかった。好き」「あぁあぁあッッ……!!!」「はぁ……っ、野分、イッてる……かぁいい……。野分、あたしも、もうこんなのよ」「うぁ……すごい、とろとろ」「もうすぐイくから……抱っこして……」「あ……舞風」「ん、震え……!?　舞風、大丈夫？」「ぎゅって……してくれ、たら……」「わかった……。安心して、イッて」「ん……く……んんんッ!!!」「……舞風。もうずっと、離さないから……」「……ん……」

放尿

「あは、野分、すごいびしゃーっておしっこ出てる」「うぅ……舞風、野分とこんなことがしたかったのね」「うん。こうやって、並んで一緒におしっこしたいって思ってた。……ヘンかな？」「うん、ヘン」「ひどーい！」「でも……気持ちいい。……舞風のおしっこも、いっぱい出てるね」「……どうして泣いてるの、野分」「ま、舞風、こそ」「あれ……」「……なんか……幸せねぇ野分たち……」

夕雲型二番艦 巻雲

下着姿

「あなたまで巻雲の裸を見にくるなんてね」溜息をついて服を脱いだ巻雲に、おや、と思いました。ああ、呼び捨てなのは彼女も同僚だったからですが。「『も』って？」「想像つくでしょ？　秋雲のモデルとして脱がされるの。もう慣れちゃったけど、まさか秋月がロリコンだったなんてね……」

胸部装甲

「うはぁ……まっ平ら……かわいい……」「喜んでいいのかな、それ」指で押してもほとんど沈みこまない巻雲の胸。押したり撫でたりして無心に遊んでいると、いつしか巻雲が瞳を潤ませ、頬を紅潮させていました。「はやく……続き……」

陰部・放尿

外部装甲をつけた状態でタイツとパンツを脱いでもらい、座って足を広げさせました。ぷにぷにした無毛の恥丘に、峡谷のような陰裂。陰核包皮がはっきりと自己主張し、その下からは薄黄色の尿がぴゅっと「!?」「あっ……」ちょろろろ……「あっ、あっ」突然の失禁に、巻雲も私もうろたえるばかり。「ど、どうして」「わかんない……出ちゃった……」その間も排泄は続きます。私の理性が音を立てて崩れ去りました。

性器・放尿

「や……ぁ、こんな……格好ぉ」「よく見えるよ巻雲……お尻の穴も、おまんこも。こうすれば」「あっ……広げ……ないでぇ」「おまんこの穴……ちっちゃい……私の小指入るかな。ひだひだもできてないし、お豆も全然……巻雲まんこは[redacted]まんこね」「うぅっ……秋雲よりいじわるだよぉ」「ごめんね……巻雲のおしっこがかわいすぎて、秋月、もうダメ……。ね、全部出しちゃって。私にかけていいから……むしろ飲んであげるから」「あ、秋月の変態い……んんッ」「あ、あ、出てる、おしっこ出てる……噴水みたい……かぁいい……かぁいいよぉ……」

放尿

「巻雲、トイレ近いのね」「うう、そうかもしれない……緊張するとどうしても……。戦闘終わったらすぐにその場でしてるの。でないと、漏らしちゃう」「お漏らしもいいけど、ちゃんとおトイレでしないとね……。そう、足開いて、スカート持って。さあ、ちっちしようね、秋月お姉さんが見てあげるから」「どんなキャラよ……あ……ん」しゅるしゅる、しゅー……「あぁ……巻雲のしーしー、かわいい……」「秋月ったら……どうせ、他の子にも言ってるんでしょう」「みんなかわいいんだもの」「とんだ防空駆逐艦ね……ん。終わった」「あ……今、おつゆ垂れたよ。とろーって……興奮してるのね。巻雲のエッチ」

自慰・放尿

「あ、あー……」「巻雲、イッた？　あ、またおしっこ漏らしてる……いただきます」「……おしっこ飲まれたの、二人目」「ひとりめは？」「夕雲姉さんが……まだ、司令官様と深い仲になる前に、ほんの気まぐれで寝たことがあって。そのときに……びっくりしたけど、おいしいって、言ってくれた。すごく気持ちよかった……そのときのことが、忘れられないの。秋雲がそばに居てくれなかったら、私、壊れてたかも」

夕雲型四番艦
長波
下着姿・胸部装甲
私と同じく、水雷戦隊旗艦も経験した長波さんにはどこか風格が漂っています。……胸の大きさは関係ないと思います。思いたいです。ていうか長波さんも、被弾したら目のやり場に困るレベルで巨乳ノーブラですよね。「ん？ああ。そりゃ男に見られるのはイヤだけど、女所帯だし気にしてなかったな」
下着姿2
「乳バンドなぁ。あんまり色っぽいのはあたしのキャラじゃないし、ああ、これなんかいいんじゃないか？動きやすそうで。あんまり乳がデカいと戦闘中ジャマなんだよ……おぉ、長波サマ、ちょっと強くなったかな？　どうだ秋月」
陰部
「まあ乳くらいならいつでも揉ませてやるから、遠慮なく言いな。って、そうかお前ロリコンだったな、悪い悪い。じゃあこっちはお前向きかもしれんなあ。ようと。イヤ、なんかアンバランスな身体でさ、乳はデカいんだけど下の毛がまだロクに生えてないんだよ。もしパンツまで吹っ飛んじまったら、ちょっとアウトだよな、コレ」

性器

「あたしのまんこなんか見て面白いのか？」と眉をひそめつつ、くぱ、と左の陰唇を指で引っ張って中を見せてくれました。小ぶりですが、はっきり育った小陰唇が自己主張しています。「おぉ、こんなふうになってんのか。イヤ、普段見る機会なんかないからなぁ。他の連中のだって、別に意識しないし。好きな相手でも居りゃあ別なんだろうけどさ、あたしはどうも色恋沙汰に向いてないみたいでね。島風と雪風？　そりゃダチだけど、別にセックスしたいとかじゃないし」

放尿

「ションベンに興奮するたぁ、お前もヘンなやつだなぁ。いや、意外とそういう艦娘多いみたいだけどな。まあいいか、ちょうど溜まってたところだし、遠慮なくションベンさせてもらうわ。見とけよ見とけよ～」じゃおおお……「あー、なんかすげえ勢い……って、お前すごい興奮してんな！……ごめん、まだ出る……ふぅ、すっきりした。はは、ションベンくせー！　……なんか、ションベンの匂いであたしまでムラムラしてきたぞ。秋月の変態が伝染っちまったかな」

自慰

「な……長波サマだってシコるよ、そりゃ。気持ち……いいし。んっ……はぁん……しょう……しょお……あたし……あたし……」

Zerstörer 1934

Z 1 Leberecht Maass

下着姿

エー、エー……ビッテ、フラウ・レーベ。「どうしたの。フラウ・アキヅキ」あ、よかった、日本語で会話できそうです。ええと、かくかくしかじかろろり。「……!? Bist du dumm oder was!?」はい? 「君も僕を男の子だと思って脱がそうとしているの!?」え、え? 「いいよ、好きなだけ見なよもう」

胸部装甲

「Guck mal! ちゃんと女の子の……む、胸だろう? そりゃあ小さいけどさ」なるほど、中性的な見た目にコンプレックスを持っているようです。かわいいと思うんですけどね、レーベくん。「……くん?」あっ、いえ、トゥート・ミア・ライト……。

陰部

「O.Ich beschäme mich... ど、どうだい。Pimmel なんかどこにもないだろう……? どこから見ても女の子だよね?」お、おお、桃みたいにかわいらしい割れ目が目の前に……。薄紅色に色づいているのが真っ白な肌によく映えます。でも、秋月、少し悪戯心が芽生えてしまいました。

性器

「Autsch!?」「うぁ、柔らかい……」オホシ、ここのこれは、おちんちんじゃないんですか？」「違うよッ！」「じゃあ、何ですか」「そ……それは……die Klitoris…」うおおおお！流暢なドイツ語でクリトリスって!!

放尿

「もう！　これなら疑いようもなく女の子だってわかるだろ!!」言うが早いか、；パンツを半分脱ぐと、外部装甲の裾を胸までまくりあげ、そのまま少し膝を曲げ、立ちションを始めました。じょろじょろ、しゃあああ……割れ目から勢いよく噴きだした尿が放物線を描いて地面へ。あ、秋月も鼻血をぼたぼたと地面へ。「何処から出てる!?　Klufからだろ!!　間違ってもPimmelなんかじゃないよね！」い、いや、一度だけなら誤射かもしれません。「Scheisse!!」「……Was macht ihr denn los?」ふと気がつくと、レーベくんの妹・マックスさんが心底呆れた顔で私たちを見ていました。レーベくん、今にも轟沈しそうです。

Zerstörer 1934

Z 3 Max Schultz

下着姿

「あまりレーベをからかわないであげて。単純な子なんだから」すみません、かわいくてつい……。「典型的な性犯罪者の言い分ね」辛辣な言葉を私に投げつけながらも、マックスさんはささっと下着姿に。「Zur Freundschaft zwischen Japan und Deutschland」なんと尊い志……それにしても、なかなかセクシーなパンツですね。「元の支給品よ。レーベは恥ずかしがって自分で買ってたわ」

胸部装甲

レーベくんとは対照的に、わりと膨らんだ胸部装甲。ん……思春期おっぱいはこの絶妙な硬さがいいんですよね。浜風のは特別ですけど。「……人の胸を揉みしだきながら冷静に感想述べないでくれる？」

陰部

「尊い……」私は熱に浮かされたように溜息をついて、目の前でもじもじしている全裸のドイツ駆逐艦娘姉妹を見つめました。こうして見ると姉のレーベくんのほうが小柄なんですね。そして、二人とも無毛なんですが、レーベくんの恥丘はぷにぷにしていて割れ目が比較的下付きなのに比べて、マックスさんはシュッと小股が切れあがっていて割れ目も上付きなので正面からはっきり見えます。同型艦でもこんな違いがあるんですよね。

性器

「Kleine Muschi……」「O öffne so nicht!」「……Wie fühlst du dich jetzt?」「O O Gott... schon bequem...」えー、完全に二人の世界に入ってしまい、ドイツ語が乱れ飛んでいます。秋月訳ではこんな感じです。「ちっちゃなおまんこ」「やぁ、広げないで……」「……どう？」「あ、あっ、きもちいい」うっ、また鼻血が。さすが、欧州の子はエロスに関してとっても先進的といいますか……。さっきも言ったように、性器のかたちも、レーベくんとマックスさんではだいぶ異なります。小陰唇の発達具合とか、陰核包皮の大きさとか。お互いのそこを確かめあう姉妹、素敵ですよね……翔鶴さんと瑞鶴さんも、きっと。

放尿

「レーベは女の子よ。とってもかわいい。フロイライン。ね、フラウ・アキヅキ。よく見えるでしょう……私と同じところから、同じようにレーベのおしっこが出ているの。どう見ても……女の子よね」「はい……二人ともすごくかわいいです。こんなにかわいくおしっこを出す子が、男の子のはずがありません……」おしっこをしながら、額をくっつけあってくすくす笑う天使が二人。とても尊い、光景でした。

秋月型一番艦
秋月

下着姿

私は囲まれていました。殺気立った大勢の艦娘に。「で、どういうつもりだ」ひときわ厳しい顔つきの磯風が口を開きます。「『思い残すことはありません。解体してください』司令に対し、たしかにそう言っていたな？」「……」私は目を逸らしました。「だって……私はどう考えても異常じゃないですか。駆逐艦娘に欲情し、劣情を抑えきれず、さんざん不埒な行いを……仲間であるはずのあなたたちに。この『秋月』という艦娘はエラーです。解体されて、〝素〟の状態に還元されて、せめてものご奉公を」「痴れ者が！」磯風が大喝、私は震え上がりました。「これだけ手を出してきて、お前は何を見てきたのだ。思いだせ。お前は拒まれたか？　目を開け。ここに居る者たちは今、お前を追い出そうとしているか？」「それは……」どうしてでしょう。みんなすごい目で私を睨んでいるのに、ひとかけらの敵意も感じないんです。「それになな」磯風の隣で、浦風がニヤリと笑いました。「うちら、まだあんたの身体を拝んどらんきに」「え」「それ！　剥いちゃえ！」

胸部装甲

「きゃあっ!?」ブラを剥ぎ取られ、パンツ一枚にされてしまいました。「……貧乳」「うっ」初雪さんの容赦ないカットイン攻撃。「図体は大きいのに、おっぱいはあたしたちと大差ないのよね！この子」朝雲が追い討ちをかけてきました。「ていうか、ホント羨ましいぐらい細いわね」「でも、体力とか少し心配よねぇ」荒潮さんが首を傾げます。「食が細いのかしらぁ？」「それはよくないな。よし、この磯風が腕によりをかけて美味い飯を作ってやる。お前の舌が満足するまで、勝手にここを去ることは許さん」「それは死刑宣告じゃ……」ぼそりと谷風。

陰部

「おお……こっちはまあ、それなり」決して多くはない私の陰毛をしげしげと眺め、いつのまにかやってきていた秋雲さんがつぶやきます。「やたらエロいパンツ見せ放題だから、いろいろすごそうだと勝手に思ってたけど、なんか、普通に年頃だな」「わ、私のパンツは最初からアレだったんです！」私は半泣きで言い返しました。「私だって……駆逐艦ですよ……ただの[redacted]です。エッチなことばかり考えてる、クソガキなんです」「それは聞き捨てならないわね」霧島さんが眼鏡をくいっと押し上げました。「それなら、私たち大型艦には監督責任があるわ。あなたを、艦隊の防空を任せられて、仲間と信頼しあえる、一人前の艦娘に育てないとね」

性器

「ふふ。九九艦爆の足くらいかわいい」「や……ぁ」震える指で広げた私の性器を覗きこんで、瑞鳳さんが微笑んでいます。「クリおっきいのね」「これは、罰ですか」私は涙を抑えきれません。「あのとき、護れなかったことへの」「それは、違うよ」私の頬に手を添え、瑞鶴さんが真剣なまなざしを向けてきました。「私たちは、精一杯やった。秋月もがんばったことはこの瑞鶴が覚えてる。またこうして会えて、本当に嬉しいの」そして目を閉じ、再び開いたときには怒りの色をたたえていました。「だから、私たちのことをほうって勝手にどこかへ行こうとしたことに、私怒ってる。……今度はずっと一緒に居てよ。帝国海軍の誇った、防空駆逐艦なんでしょ。あんたの居場所は、空母機動部隊の随伴部隊よ。また居なくなったら……寂しいよ」

放尿

「ふぁぁ……」全裸で排泄しながら、私は快感に打ち震え、そして、泣いていました。どろどろした暗い感情が、おしっことといっしょに流されていくようでした。……「全部出た？」翔鶴さんに尋ねられ、私はじゃくりあげながらうなずきました。翔鶴さんはふんわり微笑んで、私を抱き寄せると、言いました。「第五航空戦隊旗艦翔鶴より、改めて、防空駆逐艦秋月に命じます。身命を賭して、機動部隊を援護し、防空任務に努めなさい。提督の指令に従い、艦娘の名に恥じぬよう、日々の鍛錬を怠らず、強く正しく在ること」「……はい」「そして……お願いです。私たちの、仲間と……友達になってくれませんか？」

「はい！」

おしっこれくしょん 駆逐艦編 四
Combined Fleet Girls Collection FAN BOOK Vol.06

発行日 2014年12月29日
第2刷 2015年01月25日

発行サークル LUNATIC PROPHET
web http://circle.lunaticprophet.org/
pixiv id=92903

発行人 有村悠 Yuu Arimura
e-mail edgeoftheseason@gmail.com
twitter id=@y_arim

印刷所 株式会社サングループ
web http://www.sungroup.co.jp/

PRODUCED BY LUNATIC PROPHET

さあ、始めましょう。
撮影、始め！

2014.12.29.